

## 研究ノート

### 英語支配と言語・文化多様性\* —自発的同意としてのヘゲモニーと文明共存の視点から—

鷹取 勇希\*\*

#### § 1. はじめに

人々は何故英語の言語を選択し、学ぶのか。この問い合わせに対する答えは人それぞれであろうと思われる。例えば、わが国においては、初等中等教育の課程において英語を学ぶことが半ば義務となっている。昨今では小学校においても英語教育が開始され、いわんや中学校や高等学校においては「外国語教育」の名の下に英語教育がなされている<sup>1)</sup>。その後、大学などの高等教育においても英語教育がなされており、卒業要件とする必修単位として英語の履修を課す場合も少なくない。また、一般社会においては英会話や商業英語など、英語の必要性を感じる個々人の意思によって英語学習が選択されている。日本は、かつてのインドや現在のアフリカ諸国のように、政治的にも社会的にも英語圏の国々の直接的な影響下にあるわけではない。それでも人々は英語の学習を自ら選択する。また、英語によってもたらされる文化的側面に対しても、人々はそれを受け入れる。このような状況は必ずしも日本に限ったことではなく、ある種「英語による言語的及び文化的支配」とでも呼ぶべき現象は今や世界中にはびこる状況である。これは単に英語という一つの言語が教育における一教科として位置づけられているだけに留まらない。あるいは、単に英語の広がりとともにその文化的諸側面が広まっているだけでもない。そこには、おそらくそれ以上に大きな意思が働いていると考えられるのである。

本研究が問題とするのはこの点である。本研究では、現在における英語の支配的な状況がどのような歴史的背景から生み出され、どのような影響をもたらしているのかという点に着目し、検討する。そのため、ここでは英語に対する人々の意識について、「ヘゲモニー」という概念を「自発的同意」という意味で用いながら考察する。同時に、この問題を言語及び文化の多様性という視点から捉え、これらの多様性と英語支配がどのように関わり合うのか

\* 本稿は、以下の修士論文

鷹取勇希:「英語を専攻する大学生の英語に対する意識」、東海大学大学院文学研究科  
英文学専攻、博士課程前期、2011年3月での研究を基礎としている。本稿ではこれ  
に文明的視点からの検討を加え、再整理した。

\*\* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻、博士課程後期

について、文明共存という観点から検討する。

本稿では、第一節での問題提起を受け、第二節で当該問題の背景を紹介し、問題点を整理する。続く第三節では、本研究において用いた「ヘゲモニー」の概念形成を紹介し、英語の言語的及び文化的支配状況との関わりについて述べる。第四節では、言語及び文化的不平等の視点から、英語支配に対する反論を論じる。第五節においては、英語が支配的であるために起こりうる言語及び文化の消滅を述べる。第六節では、伊東俊太郎の文化・文明相関モデルを用いながら、英語支配を文明論の視点から検討する。第七節は本稿のまとめを行い、英語によってもたらされるヘゲモニーと言語文化多様性の関係性についてふれ、結語とする。

## § 2. “英語支配” の現状に関する問題点

今日、英語が言語的及び文化的に強い影響力をもっていることは疑いようがない。しかし、それは単に今日に限った問題ではない。英語がある意味で支配的言語という性格をもつようになった歴史経緯として、Smith は次のように指摘している。元々英語は産業革命の言語として使われ、現在では科学と技術の言語として使われている。英語は世界中の国際空港における航空管制官の言語であると同時に、国際メールや国際会議で最も頻繁に使われる言語であり、また国際通商や国際援助においても原則として用いられている<sup>2)</sup>。このような状況を指摘した Phillipson & Skutnabb-Kangas は、「“国際的”な場面において、言語の上下関係がみられる。そしてそれは政治、経済、文化など様々な理由から、英語をトップとしたものである」と述べる。同氏は Tsuda に言及し、この立場を総じて“英語拡散パラダイム”とよんでいる<sup>3)</sup>。

また、英語の広がりについて、Crystal は、英語はグローバルな言語であると述べた上で、その詳細について次のように指摘している。英語がグローバルな言語であることは世界中の政治家によって語られ、その様子はテレビに映し出される。どこへ旅行に行っても英語の看板や広告を見る。外国の都市にあるホテルやレストランに入っても、いつでも人々は英語を理解し、そこには英語のメニューが存在する<sup>5)</sup>。これ以外にも、英語は国際的な領域に深く浸透しており、それは例えば政治やビジネス、コミュニケーションや娯楽、メディアや教育など多岐に渡る。このように、英語は国際的な共通語としてグローバルな人間関係のために役に立ち、その利便性は多くの人々によって支持されている<sup>6)</sup>。

Smith や Crystal 以外にも、英語の国際性に関しては様々な指摘がなされている。英語は国際的な場面や情報技術など様々な領域において便利で役立つものであり、例えば国際会議においても英語が用いられている<sup>7)</sup>。また、英語はグローバル化の重要な要素の一つである IT 革命においても支配的な役割を担う<sup>8)</sup>。ビジネスの世界における英語を考えると、英語母語話者との取引において用いられるだけでなく、非母語話者も含まれるビジネスの場におい

ても国際的な共通語 (*lingua franca*) として日常的に話されている<sup>9)</sup>。これらの指摘からわかるることは、英語が母語話者、非母語話者の違いなしに多くの場面で用いられているということである。結局、Smith が述べるように、英語は各々のアイデンティティや文化、政治や宗教、あるいは自らの生き方そのものを世界中の他の地域の人々とやり取りするための手段なのである<sup>10)</sup>。このように、英語の世界的な広がりは国際的な状況に影響を与え、多くの人がその中でコミュニケーションを図るための手段の一つとして英語を用いるのである。

世界において英語が言語的にも文化的にも強い力をもち、強い影響力をもって広まっていくこと、また、国際的諸場面において英語が用いられるという傾向が高まっていくことは、別な意味で、その領域や影響圏も含めて“文明の一元化”という問題を提起することになる。現在の文明の状況に対して、伊東は次のように述べている。「現在世界は地球的な文明というべきものに向かっている。・・・科学技術の発展、情報の急速な流通、交通手段の発達、または政治の国際化や経済のグローバル化など、世界が明らかに文明的に一体化しつつある」<sup>11)</sup>。つまり、このような様々な領域においてグローバル化が進んでいくことは、主として英語を用いる国々の拡大を意味し、その圏内で付隨する言語として英語が必然的に支配的な力をもつことは、文明が英語に偏って一体化していくことを意味していると考えられる。

現在では、世界の人口の三分の一が英語話者であるといわれているが、このことは英語が世界の共通語であるというイメージが単なる想像や類推ではないことを表している。しかし、ただ単にその話者数が多いだけではない。英語が幅広い地域や領域で用いられていることは、例えば次の Kachru による分類にも示されている。これは、英語話者の三つの円（内部円・外部円・拡大円）<sup>12)</sup>のことで、グローバルな範囲での英語話者の集団を区分けするための最も知られている方法の一つである。これは三つの円のそれぞれが順に小さい円を内包するように拡大していく構図で、一つ目の「内部円（Inner Circle）」には3億2千万～3億8千万の英語を母語とする人々が含まれ、二つ目の「外部円（Outer Circle）」には、インド人など英語を第二言語として話す人々がおよそ1億3千万～3億ほど含まれる。そして、文字通り現在最も広がっている円である三つ目の「拡大円（Expanding Circle）」には、日本など英語を外国語として学習するような人々が1億～10億ほど含まれる<sup>13)</sup>。このような分類に対し、Crystal は全ての国々がこのモデルに当てはまるわけではないが、英語話者の分類においては役立つアプローチとして広く捉えられていると述べている<sup>14)</sup>。この区分とそれぞれの英語話者数により、英語が幅広い国や地域において浸透していることが見受けられる。

しかしながら、その一方では残りの三分の二の者は英語を話さないということも事実である。その意味では、英語が世界の共通語であるという解釈はある種の「神話」であるということもできる。それは、世界の総人口の三分の二は英語を話さないという現実を完全に無視した結果であり、その原因の一つは他の三分の一の英語を話す者を“多い”と解釈していることに起因する。これは皮肉なことであるが、英語が世界の共通語であるというイメージはそのことを口にする人々によって事実として仕立てあげられ、言説（discourse）や物語（story）

を生みだしているのである<sup>15)</sup>。言い換えれば、英語が世界の共通語であるというような幻想は「大衆によって作り上げられた言説（discourse）」であり、英語は世界の共通語であるという偶像化された典型的なイメージが、そのことを信じるすべての人によって作り上げられ強められてきたのである。そして、その原因の大きな部分を占めているのは、人々が知らないうちに英語の力を強めることに加担してしまうという英語の支配的側面であるということができるのではないだろうか。

このように、英語がもつ強い影響力は人々の思考方法と感情に依拠し、同時にその言語や文化にまで及ぶ。言語や文化などの社会的側面に影響するということは、同時にその文明にも影響を及ぼし得る。つまり、英語が言語や文化といった人々の社会的側面や思想的側面に影響を与えていたということは、それが同時に様々な人間営為にも影響を与えているということを示唆しており、そのことによって時代の価値意識が変化させられるのである。しかしながら、実際は様々な場面において英語を選択することが当然のような状況となっているため、人々は英語の影響力に気付かず無意識に受け入れる傾向にある。

こうした英語支配の状況を検討することは、英語の言語及び文化に対する支配的状況を明らかにすることにつながり、言語及び文化の多様性とその関わり、延いては文明共存という問題に一つの視点を提示することになると思われる。

### §3. 「ヘゲモニー」

#### (1) 概念形成

まず、本研究で用いる「ヘゲモニー」という概念について検討を試みる。19世紀の政治学者 Antonio Gramsci (1891-1937) は、階級間の関係と国家内の社会集団に当てはめるためにヘゲモニーの概念を発展的に用い、この概念について次のように論じている。

「(ヘゲモニーは) 学校や宗教、家族などといった様々な文化団体を通して形成される。ある者は他者よりも強力な権力をもち、その「他者」は結果としてイデオロギーの拡大とヘゲモニーの構築に助力させられることになる。これらの拡大と構築の過程において最も明らかで動的なものは新聞などの出版物であり、例えば出版社や政治新聞、科学・文学・哲学・大衆などといったあらゆる種類の雑誌から教区会報なども含まれる。だが、この構築に関わるのはそれだけではなく、直接的、間接的を問わず世論に影響を及ぼすものであれば全てが含まれる。例えば、図書館や学校、協会や様々な同好会、さらには建物や設計、道路の名前なども構築要素の一つとして含まれる。」<sup>16)</sup>

また、Robinson はヘゲモニーを「国家や集団が国境を越えた状況において、それらの支配を国際的な舞台で行使しうるような一種の形式」<sup>17)</sup>としている。これに対して Demont-Heinrich は、まずこの概念の広義の解釈として、権力と富、政治と経済が切り離せないような国際的な非対称の構造において、ヘゲモニーは国境を越え、合意を得るための支配として機能すると指摘する<sup>18)</sup>。Demont-Heinrich はさらに焦点を絞り込み、グラムシが提唱する意味でのヘゲモニーの概念に依拠しながら、「ビジネス・科学技術・国際政治、そして高等教育などといった世界的な勢力規模で最も明らかに現れる社会現象」<sup>19)</sup>と言及する。つまり、ヘゲモニーはただ単にグラムシが言及する異階級間の格差として生じる社会現象に留まるばかりではなく、現在ではむしろ経済・社会科学・政治・国際状況・教育組織など様々な領域において論じられる多くの要素を含有する概念として成立していることになる。

本研究においては、ヘゲモニーの概念を Demont-Heinrich に依拠して「支配的な集団によって、多くの大衆の社会生活全体に与えられた自発的同意 (spontaneous consent)」<sup>20)</sup>として捉え、その観点から現在の英語支配の問題を考察する。

## (2) 英語の言語的優位性とヘゲモニー

今日、英語の支配的な地位は二つの要因をもつとされる。一方は、19世紀に向かってピークを向かえたイギリスの支配的な勢力の拡大であり、他方は、20世紀の世界経済を牽引するものとしてのアメリカの台頭である。そして、現在の英語の世界的な地位は後者によってより一層説明される<sup>21)</sup>。これは比較的よく言われることで、仁井田も同様に、英語はまず大英帝国の繁栄と共に最も強力な国際的言語となり、続いてアメリカが政治や経済の領域で権力を手に入れると、英語の力はさらに強められたと言及している<sup>22)</sup>。また、アメリカは第二次大戦後の政治や経済が世界的に不安定な状況において、主として指導的な一時として強制的な支配を通してその力を行使してきた<sup>23)</sup>という点も忘れてはならない。

Demont-Heinrich は、このような英語のグローバルな広がりは、世界中の一つの動きであるだけでなく、継続する支配の一つとして言語的な特権と階層を形成しているとする。また、この広がりは仕向けられた選択であり、排除が多く蔓延し、継続する言語的強制と均一化であると主張している<sup>24)</sup>。また、Demont-Heinrich は、英語は主に次の四つの側面において優位語とされると指摘する。(1) 学術研究の言語としての側面（「客観的」な事実を提供するもの）、(2) 機会を与える言語としての側面（世界中における個人的・集団的な（経済的）成功を手助けする能力）、(3) 普遍的な知識の言語としての側面（知識と情報の創造や交換を押し進める能力）、(4) グローバルな言語としての英語（世界中の（グローバルの）最も良い意見表明手段としての象徴）<sup>25)</sup>。

このような側面において英語が優位な言語となると、人々は英語の選択を当然のように意識し、それに自ら同意をするようになる。この意味で、これら四つの側面は自発的同意としてのヘゲモニーに関連しているということができる。それゆえ、「世界の発展は英語がまさに

唯一の言語体系であることを象徴し、その体系においてこそ、現代なお成長しつつある世界的な秩序が構築されうる」<sup>26)</sup>のである。そして英語は「「未来への投資」であり、「インターネットにおいて最も行き来している言語」であり、「グローバルな経済の国際的な共通語（lingua franca）」であり、「良い仕事やビジネスの成功と富へのパスポート」であり、「社会的地位の向上のための言語」である」<sup>27)</sup>と考えられる。続けて、英語はしばしば「あらゆる知識の生産と交換のための基礎的な手段」<sup>28)</sup>であるとされるのである。

それでは、そもそも何故英語が幅広くそして頻繁に用いられているのだろうか。この点に関しては二つの理由があると考えられる。一つは「英語母語国の力と影響」であり、もう一つは「多くの世界的コミュニケーションが英語母語者から発生し、あるいは英語母語の人々へと向けられているという事実」である<sup>29)</sup>。しかし、現在では英語母語話者以外の多くの人々からも、それぞれの母国語によって多くのコミュニケーションが世界へ向けて発信されていることも考えられるだろう。だが、国際的なコミュニケーションにおいては、非英語母語話者同士でもより大きな頻度で英語を使っているという事実がある<sup>30)</sup>。これは、つまりは英語の非母語話者の間でも相互のコミュニケーションを図るために、自ら進んで英語の使用に対して同意をしているからであるということができる。この背景には、英語が共通語となっていることを理由に英語を学習させるようなシステムがあり、その結果、非英語母語話者同士のコミュニケーションにあたって、英語を選択せざるをえないような状況が生じていると考えられる。この意味においては、英語は支配的な役割を担っていると思われるのである。

非英語母語話者が英語を学習するにあたっても、「英語教育は、目標言語と目標文化の理想的なイメージを構築する一因となっているだけでなく、世界に存在する不平等と不公平に対して疑問を抱かせることに失敗している」<sup>31)</sup>。つまり、英語教育においては、英語の言語と文化を受け入れることは利益となるというような言説と共に、英語の学習者は母語話者と非母語話者間に生じるようなコミュニケーションの不平等や不公平を生み出す可能性を疑わず、その文化と言語を魅力と共に受容するのである。さらに、英語が支配的な状況においても、英語を肯定的に受けとめ、自ら同意をした上で英語を受け入れるのである。これは英語のヘゲモニー化の一部であることができる。つまり、英語の高い地位の確立は、英語の非母語話者が国際的な状況においてお互いにコミュニケーションを図るために英語を学び、実際のコミュニケーションにおいて多用することによって進められ、その結果として英語の地位はより強固なものにされるのである。

### (3) 英語の文化的優位性とヘゲモニー

文化的側面として考えられるのは、例えばアメリカからもたらされる文化的な生産物である。例えば、ハリウッド映画や歌謡曲、食品（ハンバーガーなど）、アメリカの俳優や女優の洋服や装飾品など様々なものがあり、このような大衆文化（ポピュラーカルチャー）は人々の精神に影響を与え、人々の意識を操作する強力な要素の一つであることは間違いないと思

われる。人々は、このような生産物をメディアの存在を通して知ることが多い。映画や歌謡曲や食品は、繰り返しCMを通じて人々に伝えられ、新しいものが登場すれば大々的に宣伝される。アメリカの俳優や女優が身につける衣類や装飾品は、多くの場合はファッション雑誌を通して人々に伝えられる。このような生産物の情報もメディアを通して人々に届けられ、英語にふれる機会をより多く与える。また、音楽業界における英語の影響は大きく、歌手の名前やCDの題名、歌詞にも英語が登場する。

英語のグローバルな利用は特定の種類の英語の広がりを意味すると主張する Bambose は、アメリカ英語とアメリカ文化の急速な広がりは上のような文化に起因すると述べる<sup>32)</sup>。また、津田は、このような日常生活のアメリカ化を問題視する。世界の“アメリカ化”が“画一化”を生じさせているとし、それによって世界中の伝統文化が後退し、人々の価値観に大きく影響をもたらしていると述べている<sup>33)</sup>。

このような英語の支配的（であるような）状況に対して、吉武は次のように言及している。

「英語の言語と文化は、幸か不幸かどこへでも浸透するだけでなく、多くの人々はそれらに対して憧れる。そしてこのことが、英語の言語や文化が影響力をもち、流行性をもち、理想とされていることに対する一つの理由である。人々は英語の思考様式や文化パッケージに憧れをもち、そして英語の言語に関する価値や基準を熱心に習得しようとしている。「英語が世界の共通語であるというイメージ」は、そのことを口にする人々によって「事実」に仕立てあげられ「言説」や「物語」を生みだしている。これらの憧れにせよ、期待感にせよ、英語学習者は『自発的』に英語を学ぶモーターを教育の場（例えば個人向けの英語塾や英会話レッスン、英語の通信教育講座）で植えつけられる。このような憧れと期待感を含んだ英語に対する態度は、自然に発達するのではなく社会によって刷り込まれている。英語はこれらの学習者とともにウイルスが媒介生物を通して増殖し続けるのと同じように継続的に増殖を続ける。」<sup>34)</sup>

つまり、文化的な英語支配及びそれからもたらされる言語的支配を考えると、英語が身の回りにあることはごく自然であり、まるでそれが当たり前であるかのように認識される。そして人々はあえて意識しなくともその影響を受けており、こうした状況がますます英語の言語的支配を進行させていくことができる。

このように、英語の言語的あるいは文化的な支配的状況が広まり、その価値観や観念形態へ自ら歩み寄っていくことは、グローバルな文明の“一体化”や“一元化”を生み出す恐れがある。そして、こうした状況はやがて人々の生活や価値意識などの変容を可能にし、アイデンティティーや文化的な独自性の喪失につながることが懸念される。

これは第6節以降で議論するが、伊東は現在の世界状況をふまえて、一方では文明の“一

体化”、“一元化”が推し進められ、他方ではそれぞれの地域が独自の文化や価値意識を重視し、文化多様性の維持を志向することの必要性を指摘している<sup>35)</sup>。しかし、英語による言語的及び文化的支配の状況を考えると、状況はかなり複雑であると思われる。それは、上で述べてきたように英語の言語的及び文化的支配的に對して自ら肯定的な意識をもっているような「自発的同意」の傾向が見られるからである。特に日本の状況を考えてみても、現代の若者層には英語の文化的側面に対しても肯定的意識をもち、その影響を取り入れて「真似よう」とする状況が見受けられる。したがって、こうした英語による支配の下では自らアイデンティティーを備え、文化の独自性を保持し続けることは難しいと思われるのである。

#### § 4. 英語支配に対する反論 一言語・文化的不平等の観点から—

前節では英語や英語母語話者の支配的な状況について述べたが、その一方でこれに批判を唱える人々も存在する。かねてから英語支配論を訴えている津田は、英語支配を端的に、「英語が世界に広まっているがゆえに起こっているさまざまな不平等と格差と差別のことをいう。・・・英語は単なる言語や手段を越えて、人と人、国と国との間に階層と序列という支配構造を生み出している」とした上で、次の六つにおいて問題が起きていると述べる。(1)コミュニケーションの不平等 (2)言語抹殺 (3)文化の画一化 (4)情報格差 (5)精神支配 (6)英語を基盤とした序列化<sup>36)</sup>。さらに、支配という意味での英語ヘゲモニーは言語とコミュニケーションの領域内にはとどまらず、経済・政治・社会階級・教育・科学・メディアなどを含む、我々の生活のほとんど全ての領域に影響を及ぼすと述べる<sup>37)</sup>。また、「グローバルな標準語として支配している英語の巨大な影響から逃げ出すことは、どんな言語にとっても非常に難しいことである」<sup>38)</sup>。例えば、英語ヘゲモニーに直面したフランス語やスペイン語、アラビア語などといった支配言語は、国際的なコミュニケーションにおいてその力を失っている。実際、1992年から1999年の間の国連における英語で行われたスピーチの割合は45%から50%に増え、一方で上記の言語の割合は全て減少している。フランス語は19%から13.8%へ、スペイン語は12%から10%へ、そしてアラビア語は10%から9.5%へというように、国際的な場面におけるスピーチは英語に傾倒している<sup>39)</sup>。それぞれの言語における減少の割合は低いとはいえども、これら全ての「支配的な言語」は英語ヘゲモニーの影響を受けている<sup>40)</sup>。また、Calvetはこれらの強力な言語を「スーパー中心言語 (Super Central Language)」と呼び、英語をさらに強力な「ハイパー中心言語 (Hyper Central Language)」と呼んでいる<sup>41)</sup>。世界中の多くの人々は、「ハイパー中心言語」(つまりは英語)の引力に引き寄せられるとし、引き寄せられた結果として英語へとシフトしていく原因となると指摘している<sup>42)</sup>。

ところで、支配という意味での英語ヘゲモニーと、それによってもたらされる英語格差に対する議論は三つの立場に分類することができる。

一つ目は英語国際化肯定派（Pro-Hegemonic position）と名付けられ、基本的に英語がグローバルに広がることを歓迎する立場である。この立場の主張者は概して英語の広がりを問題としては捉えず、歴史的に避けられない結果として捉える<sup>43)</sup>。この立場を代表する者として Crystal の主張が挙げられる。この主張においては英語のグローバルな支配の必然性が強調され、このような広範囲にわたって世界中に広まった言語は他にないと述べられている。しかし、最も重要なのはその統計ではなく、1950 年代からこの広がりが起こっているという事実である。1950 年代においては、世界語として英語が用いられている状況は妥当な範囲に留まっていたが、それから 50 年が経った現在、この状況は事実上難攻不落な段階にまでいたっている。実際、現在の英語の普及を止めることは不可能であり、その広がりに影響をもたらすことは何人にとっても不可能なことである<sup>44)</sup>。つまり、現在の英語の世界的な広がりは、以前と比べより強大なものとなっており、その広がりや人々に英語が普及していくことを止めるることは不可能であると主張しているのである。この主張に対し、Tsuda は「Crystal の言説は、英語の支配を受け入れるほかには無いかのような論調であり、英語ヘゲモニーと英語格差の強化を果たしている」<sup>45)</sup>と批判を表明している。

分類の二つ目は、英語国際化中立派（Functional/Ideological position）と名付けられ、英語の中立的機能に着目し強調する立場である。この立場の主張者は、国際的な共通語（*lingua franca*）としての英語の中立的な機能を強調しているため、英語ヘゲモニーと英語格差を支持してイデオロギーを再び作り出す。この立場は、標準英語と非標準英語の平等を確立しようすることによって特徴付けられる。非標準英語には、インド英語やシンガポール英語などが含まれる。このような英語は世界英語（World Englishes）と呼ばれており、主要な主張者として Braj B. Kachru が挙げられる。Kachru は、世界中では様々な英語が用いられており、“English” を English “es” と複数形で用いている。English “es” となっていることで、（例えば商業などにおける）英語の機能的な側面の変種や、（例えば公式な場面などにおける）英語の正式な側面の変種、そして国際的な文化変容を象徴するのである。この立場は英語支配の影響を問題視することなく、単純に英語のグローバルな拡散を認めているとし、これはイデオロギー的（Ideological）と名付けられる。したがって、この立場は国際的な場面における英語の使用を明らかに推進しているわけではないが、英語の機能的な多様性を積極的に肯定することから、実際は英語のグローバルな支配を手助けしているものと見てとれる。この意味において、この立場は英語国際化肯定派（Pro-Hegemonic）の立場に似ている。何故なら、両方とも英語のグローバルな拡散を受け入れ、そして国際的なコミュニケーションにおいて英語の使用を前提としているからである<sup>46)</sup>。

そして最後に、分類の三つ目は英語国際化批判派（Critical/Transformative Position）と名付けられ、英語のグローバルな拡散を、不公平、不平等、そして差別の原因となる重大な問題であると捉える立場である。この立場を標榜する者たちは、英語のグローバルな支配によって引き起こされた問題を批判的に検討し、そして権力関係をより良いもの、すなわちへ

ゲモニー行き過ぎた支配から自由な状況へと移していくことを目的として、これらの問題を生産し再生産するイデオロギーと権力構造をあばこうとするのである。この立場を代表する者として、Tsuda は Phillipson 及び Pennycook を挙げている。Phillipson は、「英語の支配は、英語と他の言語の間の構造的不平等と文化的不平等の確立と継続的な再構築によって行使され、保持される」<sup>47</sup>と述べる。つまり、英語の言語は他の言語を圧迫し、それによって英語はより支配的な言語となっていくのである。後者もまた同様に、英語の支配的な側面を問題視している。今や英語は権力の言語となり、社会が国際的に発展していくことや経済的に進歩するための重要な鍵となっている。このことから、英語は多くの国々で支持されている。また、それ以外にも専門分野など特定の領域における英語の存在は権力の違いを深刻にする。そして、このような広範囲に渡る英語の使用は他の言語を脅かすことにつながる。そして英語は、資本主義の拡散や開発援助、北米メディアの支配などといったグローバルな側面と密接に関係しているのである<sup>48</sup>。

Tsuda は、Phillipson 及び Pennycook の主張を肯定的に受けとめ、次のように論じている。つまり、私達が生きている世界とは、英語が国内及び国際的に重要な役割を担っているような世界である。英語は他言語を支配し、脅かし、そして英語話者と非英語話者間の不平等の構造を作り出す。英語へゲモニーは英語格差を引き起こし、言語とコミュニケーションの領域内にはとどまらず、さらに経済・政治・社会階級・教育・科学・メディアなど私達の生活のほとんどの領域に影響を及ぼす<sup>49</sup>。つまり、英語の言語が世界的に広まることによって、英語はコミュニケーションの一つの手段として、あるいは様々な領域における優位言語として展開する。その一方で、このような英語の言語の支配的な広まりは言語的不平等をもたらし、英語の言語に付随する文化の支配的な広まりも言語同様に文化的不平等をもたらしかねないという点も懸念されるべき問題なのである。

## § 5. 英語支配と言語・文化の消滅

前節までは英語による言語的及び文化的支配的状況に関して、その歴史的背景と現在の状況の検討を試みた。その結果、人々が自ら英語支配を受け入れる選択をしていくという意味で、「自発的同意」としての英語のヘゲモニー的な傾向が進みつつあることがわかった。こうした状況をふまえ、以下では英語支配がもたらす言語及び文化の消滅を考察する。

英語の言語的及び文化的な支配は様々な要因が互いに連鎖し合ったものであり、このような複雑な構造が支配的な状況を生み出しているということができる。つまり、英語による支配が言語だけでなく文化的側面からも推し進められているという状況、言い換えれば英語の言語的側面だけではなく、特にアメリカ自体から受ける文化的優位性の影響が顕著に表れていると考えることができる。このような英語支配の結果、様々な言語や文化は英語へと「引

き寄せられ」、そして時には消滅していくのである。

まず、言語と文化の関係性について概観すると以下のようになる。例えば、鈴木は“ことば”を「文化の重要な構成要素」として捉え、文化を次のように定義している。

「ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型（構図）のことである。……つまり文化とは、人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社会的強制（慣習）の部分をさす概念だと考えて頂いてよい。」<sup>50)</sup>

そして、「人間の言語活動の大部分にも、このような文化の定義があてはまる」<sup>51)</sup>と述べる。この鈴木の主張をふまえると、“ことば”（あるいは言語）は文化とほぼ同義のものとして捉えることが可能である。

また、言語と文化の関係性については以前から“サピア＝ウォーフの仮説”がある。言語と文化の関係性という視点から考えると、エドワード・サピア（Edward Sapir）とその弟子であるベンジャミン・ウォーフ（Benjamin Lee Whorf）の主張は「それぞれが有する言語は、その文化の範囲内での思考と習慣を決定する」となる<sup>52)</sup>。すなわち、この“仮説”では言語が文化を決定することになるが、同時にその文化は言語を通して伝達されることになる。こうした関係性を考えれば、ある地域の言語が他言語に支配される、あるいは、その結果言語が消滅するという状況は、それ自体が「文化の死」を意味することに他ならない。

こうした懸念は他にも様々な形で議論されている。言語の消滅と維持を論じる Janse は、Campbell による定義に依拠し、言語消滅を「言語接触において、徐々に支配言語へとシフトしていくことによる言語の消失」と定義している<sup>53)</sup>。その上で、このような状況は、複数の言語が用いられるような“中間の段階”を含んでいるとされる。つまりその段階とは、支配言語と同時に、従属言語—自らの言語—が用いられているような段階を意味しており、この段階においては従属言語を使う人間やその言語が使われる場面が徐々に減り続け、最終的には自らの言語が完全に消えてしまうのである<sup>54)</sup>。

他にも、英語一本稿における支配言語—が他の言語にもたらす影響を危惧した意見がみられる。例えば Dixon は、「今日、約 4000 もの言語が話されている。しかし、その数字は確実に減り続けている。言語は世界中で年間数十の割合で使われなくなっている」<sup>55)</sup>と述べ、さらに「今日世界で話されている 5000 もの言語のうち、少なくともその 3 分の 1 (90%以上という者もいる) は 2100 年までに話されなくなるとされている。絶滅の危機に瀕したのは、そもそも欧州の植民地化によってその使用が断続的に遮断された結果である。これらの言語が消えてしまう前に、それらを記録するのは早急な課題であろう」<sup>56)</sup>と述べている。

また、Crystal は次のように述べる。

「言語の消滅が急速に増加しているという広く知れ渡った見解は、主に次のような一般的な根拠に基づいている。例えば、20世紀に国民国家の著しい成長があり、それに伴う公用語の認識がある。あるいは、それと同時期に興った国際的でグローバルな共通語（*lingua franca*）の著しい成長がある。そして、これらの進展によって少数言語がますます圧力をかけられているということが推測される」<sup>57)</sup>。

松原も同様に、「現在、ごく少数の国際語が世界中に広まっている一方で、先住民族の言語は驚くべき速さで衰退している」<sup>58)</sup>と指摘する。

言語の消滅と文化の消滅を主張する Nettle & Romaine は、言語多様性とは文化多様性の基準のようなものであり、言語消滅は文化消滅の徵候となり、言語の消滅を伴って、生活様式が失われると主張する<sup>59)</sup>。この点において、Dixon は次のように述べる。

「それぞれの言語はその話者の世界の見方—それらは、思考法であり、価値観であり、信条であり、世界の分類の仕方であり、日常生活における秩序である—を象徴している。一度言語が消滅すれば、永遠に人間の文化の一部が失われるのである」<sup>60)</sup>。

言語・文化と生物の多様性の相関について研究する Maffi は、人間がもつ言語をただ単に利便性を伴った道具ではなく、人間がもつ“美しいもの”とし、多くの言語を失うことはその“美しさ”的大きな消失であると主張する。また、集団における言語の役割について、「過去と未来を動的につなぐ“橋”であり、断続的な革新と集団の知識や信念、価値や慣習を伝えていくための伝達手段である」<sup>61)</sup>とした上で、「世界における土着の言語や少数言語は、驚くべき速さで消滅している。そしてこれらの言語は数少ない多数派言語（*majority language*）に取って代わっている」<sup>62)</sup>と述べる。そして、言語消滅が起こる原因について次のように述べる。

「言語の消滅は、自らの言語を使用することや世代間伝達を通してその言語が変化していくよりも、世代から世代へと言語が伝えられる際、完全に消えてしまうまでその使用が制限されることで起こる。このような場合において、集団におけるコミュニケーションと（言語）伝達の流れは遮断された状態であるといえる。何故なら、その話者は自発的あるいは消極的に他言語へとシフトしていくためである。そして、そのような“他言語”は大抵支配的で、より名声があり強力な言語なのである。したがって、（このような集団は）自らの母語を子どもへと教えていくことを選択しないのである。」<sup>63)</sup>

上で述べたように、言語が各々の文化的価値や世界の見方を表しているとすれば<sup>64)</sup>、消滅の危機に瀕した言語における口頭伝承を保持し、守っていくことは、我々が人間の価値や文化、世界観などをより深く理解するための手助けとなるのである<sup>65)</sup>。Crystalは、我々が抱えた言語支配の問題に対して「世界の消滅に瀕した言語の苦境的状況は、他のどんな言語的な環境の課題よりもまず検討されるべき問題である。…言語の消滅は人間の消滅であるため、すべての人間が考慮すべき問題である」<sup>66)</sup>と主張している。

このような主張をふまえれば、各々が独自にもつ言語は、それぞれ異なった生活圏を反映したものであり、生きていくための“核”的一つとでも言い換えられるであろう。支配言語はその核の消滅を促すものとして捉えることが可能である。そして、これらの主張はつまり、言語の消滅は文化の消滅と同義のものとして捉えることが可能であり、それらの消滅は究極的には消滅に瀕した人間存在そのものを意味していると思われる所以である。事実、Crystalは端的に「言語が死ぬということは、人間が死ぬということに等しい。言語は人間の存在なしでは存在しないのである」<sup>67)</sup>と述べている。消滅が起こるのは様々な要因が考えられる。それらは例えば、本稿ではふれないが、政治的な要因や経済的な要因、あるいは先に挙げたような言語的優位性や文化的優位性などである。いずれにせよ、先の優位性をふまえれば、このような言語や文化の消滅の発端は自らの選択—自発的同意としてのヘゲモニー—である場合が多いと考えられるのである。そうして支配言語が選択されていくことにより、人々自らの母語が次世代へと伝えられなくなる。その結果、母語話者が徐々に減少することによって、言語消滅が起こるのである<sup>68)</sup>。

こうした状況は、英語支配がある種の「文化転移」(cultural transfer)あるいは「文明転移」(civilizational transfer)を生じさせているとも考えられるが、この点に関しては次項でふれる。

## § 6. 文明論的視点から見た英語支配

英語支配と言語・文化の消滅は、文明論的視点からも検討することができる。それは、英語支配に対する「自発的同意」が言語的側面と同様に文化や文明の諸側面においても機能するためである。

前節でも述べたように、言語文化多様性の議論においては、ある社会、集団の文化やその根底をなす人間営為が、それらの自然に対する言語表現にあるとするモデルを考えることが可能である。こうした人間営為はそれ自体が文明の発露の一端と考えることができるため、これは言語を基礎とする文化・文明形成モデルとなる。したがって、本節での問題はそのように形成された社会、集団に対する異言語支配の問題として捉えることができる。

こうした問題に対する一視点として、伊東俊太郎が提示する「文化と文明の相関モデル」

を用いることができる<sup>69)</sup>。伊東は、ある地域の集団の生活様式を「生活体」と称し、それが一つの球体をなすとする<sup>70)</sup>。さらに、この球体が“外殻”(outer shell)と“内核”(inner core)の二層から成り、“内核”を構成するのが「文化」、“外殻”を構成するのが「文明」であるとする（【図1】<sup>71)</sup>）。伊東によると「文化」は「慣習的な生き方」あるいはその生活体が備えるエトス—「価値観、觀念形態、考え方」など—として捉えられ、その一方で「文明」はそこでの人間営為に必要な「制度、組織、装置」として捉えられる。

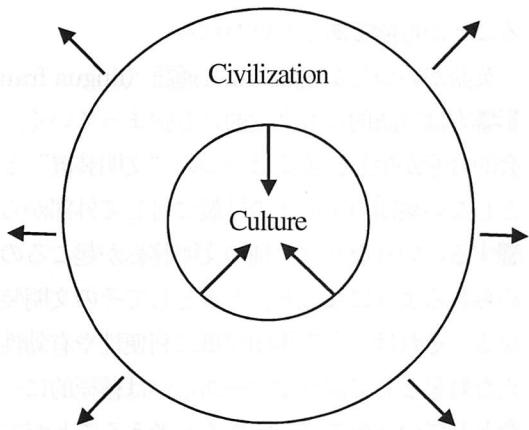
このモデルでは、外殻の文明と内核の文化は基本的に相互に作用し合うとされる。それと同時に、外殻の文明は外部に向かって働きかける性質をもつ。また、外殻の文明はその生活体に属する人々の生活様式を規定するが、それゆえに文明が内核の文化に絶えず影響を与えていることになる。

社会や集団における文化、文明をこのようなモデルとして設定した上で、伊東は異文明間の“接触”について議論する。文明を異にする集団間の接触—すなわちそれぞれの生活体同士の“ぶつかり合い”

一が生じる際には何が起こるのであろうか。この場合、基本的にはまず外殻としての相互の「文明接触(civilizational contact)」が起こり、その結果、相互の文明の交流、あるいは一方から他方への文明の移入—「文明移転(civilizational transfer)」が生じるとする<sup>72)</sup>。すなわち、生活体としての球体の外殻である文明は外部で接触する他の文明に働きかけるのである。生活体の内部では外殻にある文明と内核の文化は相互作用するとされるため、文明接触による外殻の変化が内核の文化にも影響を及ぼす。その結果、外殻である文明の変化の圧力が大きい場合には、内核に位置する文化はその影響を受けて変容することになる。

伊東は、昨今のインターネットの普及や経済のグローバル化、あるいは国際的なつながりによって文明が一体化しつつある一方で、帝国主義的な植民地の解放に伴って文化的には逆に多元化、多様化が進んでいるとし、「それぞれの文化が自分のアイデンティティーを主張しようとしている状況にある…それぞれの文化の独自性や重要性というものが強調されている」<sup>73)</sup>と指摘する。伊東のこの講演の主旨はハンチントンの『文明の衝突』を題材に将来に向けての“文明と文化の共存”を説くもので、こうした世界の状況をふまえて次のような展望を表明している。

「文明の装置を共有し、かつ文化の固有の形態を維持してゆく、人類の異った生活圏の

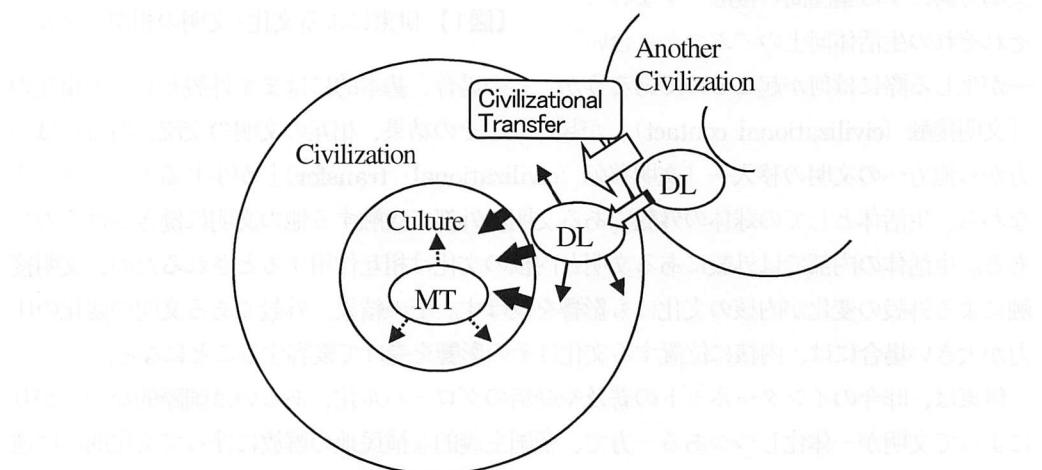


【図1】伊東による文化・文明の相関モデル

「共存の可能性」つまり「共通の文明的装置をつくり上げつつ、かつそれぞれの文化的固有性を維持していくこと」は可能であり、この可能性によって、多様な文化の中である種の文明の共通性を拡げてゆく。」<sup>74)</sup>

確かに未来的展望としての伊東の主張は、文化多様性の危機に瀕した現状に対する警鐘として十分に受けとめなければならない点がある。それはそれとして、本稿で問題としてきた英語支配の問題に立ち返れば、これも“伊東モデル”—文化と文明の相関モデル—で検討することが可能であると思われる。

英語がいつしか国際的な共通語 (*lingua franca*) としてその地位を確立するにつれ、その影響力は言語的にも文化的にも強まっていく。その結果、英語を“国際語”として見なす社会的合意が生じ、英語は一つの“文明装置”として機能することになる。本来は英語を母語としない集団の生活体の外殻に対して外部から移入された英語は、その外殻である文明に影響する。いうなれば一種の文明移転が起こるのである。そして、英語の支配が否応なしに認められるようになると、ときとしてその文明装置は内核の文化をも“浸食”し始めることになる。それは、ある集団が単に利便性や有効性を超えて英語そのものを、文化的優位性を備えた対象として無意識に—あるいは積極的に—受け入れることを意味する。これが自発的同意としてのヘゲモニーであると考えることができる。



【図2】生活体における母語と支配言語の様相

MT : Mother Tongue

DL : Dominant Language

この状況を【図1】に示した“伊東モデル”を用いて表してみる（【図2】）。生活体の外殻での文明接触により、英語を主とする文明移転が起こる。このとき英語を受け入れた文明に

おいてそれが支配言語 (Dominant Language) として機能する場合がある。その際の英語の支配が大きければ、英語はこの文明の変容をもたらすことが考えられる。これが政治的あるいは経済的な支配であるならば、外殻の文明変容と比較して内核の伝統的文化は保持される可能性が大きい。しかし、もしこの英語支配がこの生活体に属する人々の自発的同意によるものであるならば、その支配は人々の精神性にまで影響を与えることが考えられる。この場合、英語支配は内核の文化をも“浸食”することになる。

ところで、生活体において言語はどのような役割を果たしているのであろうか。内核の文化においては母語 (Mother Tongue) が重要な意味をもつ。例えば前節の“サピア＝ウォーフの仮説”を考えてみても、母語がその文化を形成する場合もあれば、文化の方向性を決定する場合もある。また、言語と文化の相関関係をふまえると、言語が文化の持続性を保証することは十分に考えられる。この場合、母語は言語として集団の価値観や精神性を形成し支えるものとして捉えられる。その一方で、外殻の文明に移転された支配言語—本稿の場合では英語—がどのように捉えられるかを考えると、むしろ情報伝達のツールとして機能している点に気がつく。支配言語は、その言語とともに異文明から様々な情報を移転させる。そして、やがて外殻の文明は支配言語とそれがもたらす情報によって凌駕される。特に、その支配が集団の自発的同意による場合には、情報伝達ツールとしての言語は内核の文化にまで及び、やがては母語をも浸食することにつながることもあり得るのである。

上での検討から、自発的同意としての英語ヘゲモニーは、結局は文明的側面としても肯定的意識をもって英語支配を受け入れることを意味していると思われる。こうした状況をふまえると、世界中で英語が言語的にも文化的にもより一層強い影響力をもって広まることや、様々な国際的場面において英語が用いられる傾向が益々高まることは、個々の社会や集団における価値の総体としての文明領域が—やがてはその集団のエースとしての文化もまた—英語によって一元化され得ることを示唆しているとも思われるのである。

## § 7. 結語にかえて—英語のヘゲモニーと言語・文化多様性—

今日、英語が言語的にも文化的にも支配的な状況であることは紛れもない事実である。その中で、英語がもたらす言語と文化に対する支配、さらにはその支配に対する自発的同意としてのヘゲモニーは、果たして言語文化多様性の問題とどのような関係にあるのだろうか。上で述べたように、名実ともに支配言語としてその地位を確立した英語は、様々な要素を伴って言語的に優位性をもち、今や他の言語（特に少数言語）を脅かす存在になっている。その支配に対して、自ら英語を学ぼうとする自発的同意としてのヘゲモニーがはたらくとすれば、英語という一つの言語は言語多様性への脅威になる。さらに、英語圏文明との「文明接触」によって英語がもたらされ、それに対する自発的同意としてのヘゲモニーが精神に内在

する価値概念としての文化にも影響を及ぼすとするなら、それは文化多様性への脅威ともなりうる。英語という“巨大言語”によってもたらされる言語消滅や言語一元化、延いてはそれに付随して起こる文化消滅の問題、つまり「英語支配による言語・文化多様性の消滅」は、我々が抱えた重大な問題なのである。

このような点に関して、津田は「ルネッサンス以降に起きた科学技術を基礎とした資本主義システムを基にした現代の文明」の枠組みを「西洋文明パラダイム」とよび、英語支配はこのパラダイムの流れから出てきたものだと主張する。そして、英語支配の問題は「文明社会全体の問題」であり、「英語を支持していくということ自体が、人類全体の危機に通じる可能性がある」と述べている。津田によれば、英語支配は他の言語の衰退や消滅を促し、地球の言語文化多様性への脅威になっている。すなわち、英語支配は単に言語だけの問題ではなく、文明のパラダイムに関わる大きな問題であり、津田の言葉を借りれば、「世界の言語と文化の環境問題」なのである<sup>75)</sup>。

確かに、英語文化により浸食や支配が引き起こされることもあり得る。場合によっては英語支配によって生じている少数言語や少文化の消滅は避けようがない。しかし、そのような状況下においても未だ多くの言語や文化が存在していることも事実である。その多様性を維持していくことが現代世界に課せられた未来への課題であると思われる。はたしてどのようにそれぞれの言語や文化を保持することができるのでしょうか。例えば、異文化理解教育や多様性に関する教育を通して他の数多くの言語や文化に対する認識を促していくことで、自らとは異なる言語や文化に対する意識の芽生えが期待できるかもしれない。英語支配によって言語的にも文化的にも一元化に向かう中で、英語一辺倒の状況をありのままに受け入れるのではなく、各国や各地域が独自にもつ言語や文化の存在をふまえてこの問題を考えていく必要性が問われているのである。

## 参考文献

- 伊東俊太郎. (2008). 「二十一世紀の文明共存へ—『文明衝突説』を超えて」. 伊東俊太郎著. 『伊東俊太郎著作集 第8巻 比較文明論II』. (pp. 383-405). 麗澤大学出版会.
- 今井むつみ. (2010). 『ことばと思考』. 岩波書店.
- 大石晴美. (2005). 「第I部第1章—地域による言語の違い」. 田中春美, 田中幸子編著. 『社会言語学への招待 社会・文化・コミュニケーション』. (pp. 19-36). ミネルヴァ書房.
- 小磯かをる. (2009). 「日本人英語使用者の特徴と英語能力—JGSS-2002とJGSS-2006のデータから—」. 『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集 [9]』. Retrieved Nov 30, 2010, from [http://jgss.daishodai.ac.jp/japanese/research/monographs/jgssm9/jgssm9\\_8.pdf](http://jgss.daishodai.ac.jp/japanese/research/monographs/jgssm9/jgssm9_8.pdf)
- 鈴木孝夫. (1973). 『ことばと文化』. 岩波書店.

- 鷹取勇希, 平野葉一. (2009). 「言語・文化多様性に関する一考察」. 『文明研究』. 第 28 号. pp. 92-109.
- 田中春美. (2003). 「V. 言語接触 8. 世界の英語」. 小池生夫ほか編. 『応用言語学事典』. (pp. 362-364). 研究社.
- 津田幸男. (2008). 「〈学内の眼：私のプロジェクトと夢〉英語とアメリカへの抵抗：アメリカで「英語支配論」を教えて」. 『筑波フォーラム』. 第 80 号. 25-28. Retrieved Dec 9, 2011, from <http://hdl.handle.net/2241/101228>
- 仁井田益雄. (1982). 「通信社と英語」. 『言語』, 11(2), (pp. 46-49)
- 松原好次. (2003). 「グローバル化と「消滅の危機に瀕した言語」」. 『湘南国際女子短期大学紀要』. 第 10 号. 113-124. Retrieved Dec 9, 2011, from [http://ci.nii.ac.jp/els/110006184519.pdf?id=ART0008157443&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1323419233&cp=1](http://ci.nii.ac.jp/els/110006184519.pdf?id=ART0008157443&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1323419233&cp=1)
- 吉武正樹. (2002). 「異文化コミュニケーションにおける言語選択—「英語の普及」をどう捉えるかー」. 伊佐雅子監修. 『多文化社会と異文化コミュニケーション』. (pp. 68-85). 三修社.
- 吉武正樹. (2006). 「言語選択と英語 見えざる権力としての資本主義」. 池田理知子編者. 『現代コミュニケーション学』. (pp. 57-73). 有斐閣.
- Bamgbose, A. (2001). World Englishes and Globalization. *World Englishes*, 20(3), 357-363. Retrieved Dec 9, 2011, from <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/1467-971X.t01-1-00220/pdf>
- Calvet, Louis-Jean. (2004). *Language Wars -Language Policies and Globalization*. Retrieved June 8, 2010, from <http://nanovic.nd.edu/assets/8706/calvetpaper.pdf>
- Crystal, D. (2002). *Language Death*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2003). *English as a Global Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Demont-Heinrich, C. (2008). Beyond Culture and (National) Identity? Language, Globalization and the Discourse of Universal Progress in American Newspaper Coverage of English. *Journal of International and Intercultural Communication*, 1(2), 136 -157.
- Dixon, R. M. W. (1997). *The Rise and Fall of Languages*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Graddol, D. (2006). *English Next*. British Council. Retrieved May 15, 2008, from <http://www.britishcouncil.org/learning-research-english-next.pdf>
- Gramsci, A. (2006). (i) History of the Subaltern Classes; (ii) The Concept of "Ideology"; (iii) Cultural Themes: Ideological Material. In Durham, Gigi Meenakshi., & Kellner, M.

- Douglas. (Eds.), *Media and cultural studies: keyworks*. (pp. 13-17). Malden, MA: Blackwell Publishing Ltd.
- Hashimoto, K. (2007). Japan's Language Policy and the "Lost Decade". In Tsui, Amy B. M., & Tollefson, James W. (Eds.), *Language Policy, Culture, and Identity in Asian Contexts*. (pp. 25-36). New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Janse, M. (2003). Introduction Language Death and Language Maintenance: Problems and Prospects. In Janse, M & Tol, S. (Eds.), *Language Death and Language Maintenance: Theoretical, practical and descriptive approaches*. Retrieved Dec 9, 2011, from <http://biblio.ugent.be/input/download?func=downloadFile&fileId=1131442>
- Kachru, B. B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle. In Quirk, Randolph & Widdowson, Henry G. (Eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*. (pp. 11-30). Cambridge: Cambridge University Press.
- Kubota, R. (1998). Ideologies of English in Japan. *World Englishes*, 17(3), 295-306.
- Maffi, L. (2002). Endangered Languages, Endangered Knowledge. *International Social Science Journal*, 54(173), 385-393. Retrieved Dec 9, 2011, from <http://www.terralingua.org/publications/Maffi/ENDANGE2.pdf>
- Mufwene, S. Salikoko. (2004). Language Birth and Death. *Annual Review of Anthropology*, 33(1), 201-222. Retrieved Dec 9, 2011, from <http://humanities.uchicago.edu/faculty/mufwene/publications/languageBirthAndDeath.pdf>
- Nettle, D & Romaine, S. (2000). *Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages*. Oxford: Oxford University Press.
- Pennycook, A. (1994). *Cultural Politics of English as an International Language*. London: Longman.
- Phillipson, R & Skutnabb-Kangas, T. (1996). *English Only Worldwide or Language Ecology*. TESOL QUARTERLY, 30(3), 429-452. Retrieved Dec 9, 2011, from [http://203.72.145.166/TESOL/TQD\\_2008/VOL\\_30\\_3.PDF](http://203.72.145.166/TESOL/TQD_2008/VOL_30_3.PDF)
- Robinson, W. I. (1996). *Promoting polyarchy: Globalization, US intervention, and hegemony*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Smith, L. E. (1983). English as an International Language No Room for Linguistic Chauvinism. In Smith, Larry E. (Ed.), *Readings in English as an International Language*. (pp. 7-11). Oxford, UK: Pergamon Press.
- Tsuda, Y. (2008). *English Hegemony and English Divide*. China Media Research, 4(1), 47-55.

- 
- <sup>1</sup> 学習指導要領では、名目上は「外国語編」となっているものの、その内容は英語の教授法に関するもののがほとんどであり、その他の外国語に関しては「英語のそれに従う」という扱いである。
- <sup>2</sup> Smith (1983), p. 7 参照
- <sup>3</sup> Phillipson & Skutnabb-Kangas (1996), p. 429, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>4</sup> 元々は津田幸男によって提唱され、英語では “*Diffusion of English paradigm*” とよばれるこの立場は、資本主義や科学技術、近代化と国際化における単一言語的な視点によって特徴付けられる。詳しくは Tsuda (1994). *The diffusion of English: Its impact on culture and communication*. *Keio Communication Review*, 16, 49-61 及び、Phillipson & Skutnabb-Kangas (1996), pp. 437-441 を参照のこと。
- <sup>5</sup> Crystal (2003), p. 2 参照
- <sup>6</sup> Ibid., p. 30 参照
- <sup>7</sup> 大石 (2005), p. 21 参照
- <sup>8</sup> Hashimoto (2007), p. 31 参照
- <sup>9</sup> 小磯 (2009), p. 124 参照
- <sup>10</sup> Smith (1983), p. 9 参照
- <sup>11</sup> 伊東 (2008), pp. 396-397
- <sup>12</sup> Kachru (1985), p. 12-15 参照
- <sup>13</sup> この Three circles of English speaker は、他にも Graddol (2006), 大石 (2005), 田中 (2003), 吉武 (2002)においても言及されている。
- <sup>14</sup> Crystal (2003), p. 60 参照
- <sup>15</sup> 吉武 (2006), p. 59 参照
- <sup>16</sup> Gramsci (2006), p. 16, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>17</sup> Robinson (1996), p. 24, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>18</sup> Demont-Heinrich (2008), p. 138 参照
- <sup>19</sup> Ibid., p. 138, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>20</sup> Ibid., p. 138, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>21</sup> Crystal (2003), p. 59 参照
- <sup>22</sup> 仁井田 (1982), p. 46 参照
- <sup>23</sup> Robinson (1996), p. 6 参照
- <sup>24</sup> Demont-Heinrich (2008), p. 153 参照。ここで「排除」とは、政治的、経済的あるいは社会的な支配によって、非英語圏における母語の排除を意味する。
- <sup>25</sup> Ibid., p. 141 参照
- <sup>26</sup> Ibid., p. 141, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>27</sup> Ibid., p. 152, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>28</sup> Ibid., p. 152, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>29</sup> Smith (1983), p. 7, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>30</sup> Ibid., p. 7 参照
- <sup>31</sup> Kubota (1998), p. 299, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>32</sup> Bambose (2001), p. 359, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>33</sup> これは、平成 15 年度 SCS による公開研究会、多文化共生社会における国際遠隔教育交流に関わる諸課題において、「ことばの平等とエコロジーを追求する英語支配論」と題して津田幸男が行った講演の一部を引用及びまとめたものである。
- <sup>34</sup> 吉武 (2006), pp. 59-61
- <sup>35</sup> 伊東 (2008), p. 397 参照
- <sup>36</sup> 津田 (2008), p. 26
- <sup>37</sup> Tsuda (2008), p. 47, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>38</sup> Ibid., p. 49, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>39</sup> Calvet (2004), p. 21 参照
- <sup>40</sup> Tsuda (2008), p. 50 参照

- 
- <sup>41</sup> Calvet (2004), p. 19 参照
- <sup>42</sup> Tsuda (2008), p. 50 参照。Calvet が提唱する「ハイパー中心言語」を用いたこのような議論は、他にも松原 (2003)においてもみられる。
- <sup>43</sup> Ibid., p. 47 参照
- <sup>44</sup> Crystal (2003), p. 71 参照
- <sup>45</sup> Tsuda (2008), pp. 47-48, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>46</sup> Ibid., p. 48 参照
- <sup>47</sup> Phillipson (1992), Tsuda (2008), p. 48 より引用。(原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>48</sup> Pennycook (1994), p. 13 参照
- <sup>49</sup> Tsuda (2008), p. 49 参照
- <sup>50</sup> 鈴木 (1973), pp. i-ii
- <sup>51</sup> Ibid., p. ii
- <sup>52</sup> これに関しては次の拙稿を参照のこと。鷹取, 平野 (2009). 「言語・文化多様性に関する一考察—A Remark on Linguistic and Cultural Diversity」. 『文明研究』. 東海大学文明学会. 第 28 号. pp. 99-102
- <sup>53</sup> Janse (2003), p. i 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>54</sup> Ibid., p. i 参照,
- <sup>55</sup> Dixon, R.M.W (2000), p. 144 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>56</sup> Ibid., p. 117 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>57</sup> Crystal (2002), p. 69 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>58</sup> 松原 (2003), p. 113
- <sup>59</sup> Nettle & Romaine (2000), p. 7 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>60</sup> Dixon, R.M.W (2000), p. 144 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>61</sup> Maffi (2002), p. 385 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>62</sup> Ibid., p. 386, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>63</sup> Ibid., p. 385, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>64</sup> 異なる言語が異なる思考法や世界観を表しているということを指摘した著書としては、他にも今井 (2010)を参照されたい。
- <sup>65</sup> Janse (2003), p. xiii 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>66</sup> Crystal (2002), p. ix 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>67</sup> Ibid., p. 1 参照, (原文は英語、訳は筆者による。)
- <sup>68</sup> このような点は、言語消滅の中心的議論の一つである。例えば、Crystal (2002), Nettle & Romaine (2000), Dixon, R.M.W (2000), Mufwene (2004)などにおいても指摘されている。
- <sup>69</sup> 本稿で扱う伊東俊太郎のテキストは以下の Keynote Address の講演録である。  
“Second International Seminar on Civilizational Dialogue” (2-3 September 1996, Univ. of Malaya)
- <sup>70</sup> 伊東 (2008), p. 398 参照
- <sup>71</sup> Ibid., p. 405 参照
- <sup>72</sup> 伊東は、生活体において文明と文化は相互作用性をもつが、一旦文明が形成されると、それは内核にある文化から独立する（文化剥離）とし、外殻にある文明は他の生活体との接触により、一方から他方へ移入され得るとしている。
- <sup>73</sup> 伊東 (2008), p. 397
- <sup>74</sup> Ibid., p. 403
- <sup>75</sup> 註 30 において参照した、津田幸男による講演の一部を引用及びまとめたものである。